

うっそうとした森の奥深くまで進んでいくと、急に道が開け滝の音が聞こえてきました。さらに音の方へ行くと水が天から降り注いでいるような大きな滝が見えました。

「この滝を抜けると洞窟があるのね。」

マヤがつぶやきました。激しく落ちる水の向こうに黒いぽっかりとした穴が揺れています。

「わたしたち、蝶は水の中には入れません。ケン、マヤ、洞窟の中に行ってもらえませんか？」



エルムはそう言い、続けて人間に戻る方法を説明します。

「この滝をくぐるには二人が心を合わせて一気に水の中に入ることが必要です。滝を

くぐった時あなたたちは人間に戻ることができます。ただし気を付けて！二人のタイミ

ングが少しでもずれると蝶の姿のまま滝壺に落ちてしまいます。」

ケンとマヤはエルムや他の蝶たちが見守る中、滝に向かい飛んで行きます。

「マヤ、準備はいい？」

「うん」

と声を掛け合うと、思いきり息を吸い滝の向こうに消えて行きました。

滝をくぐるとそこは、やっとお互いの輪郭が分かる位の薄暗い穴でした。二人は人間の

姿に戻っていました。

「暗いよ～【友情の花】、どこにあるのかしら...。」

マヤは不安そうです。

「どうやら一本道のようなだからまっすぐ進んでみよう。」

ケン^{すす}はグングン進みます。

大分暗闇にも目^めが慣^なれてきた頃^{ころ}，マヤが洞窟^{どうくつ}の壁^{かべ}の方^{ほう}をよく見^みるとたくさんの昆虫^{こんちゅう}たちが壁^{かべ}の両側^{りょうがわ}にコンクリートで固^{かた}められたように動^{うご}けなくなっていました。マヤは

「待^まっていてね。【友^{ゆう}情^{じょう}の花^{はな}】を必^{かな}ず採^とって元^{もと}に戻^{もど}してあげるからね。」

と動^{うご}かぬ昆虫^{こんちゅう}たちに話^{はな}しかけました。

キリッと口^{くち}をむすんでまっすぐ前^{まえ}を向^むいて歩^{ある}いていたケンが

「あっ！あれ、何^{なん}だろう。」と叫^{さけ}びました。

冷^{つめ}たく暗^{くら}い洞窟^{どうくつ}の先^{さき}にキラキラとした光^{ひかり}が見^みえます。二人^{ふたり}が駆^かけて行^いくと光^{ひかり}の中^{なか}にな^{ない}る七色^{はな}の花^{いちりん}が一輪^さ咲^さいていました。

「きっと【友^{ゆう}情^{じょう}の花^{はな}】だよ！」

マヤがキラキラと光^{ひか}る花^{はな}に触^ふれようとしたとき，“シュッ”と黒^{くろ}い物^{もの}が横切^{よこぎ}りました。

黒^{くろ}光^{びか}りした蛇^{へび}です。蛇^{へび}は花^{はな}の前^{まえ}にとぐろを巻^まき，二人^{ふたり}を威嚇^{いかく}します。これでは花^{はな}に近寄^{ちかよ}れません。

「蝶^{ちょう}ども，つい^{にんげん}に人間^{にんげん}をこ^つこまで連^きれて来^きたか。おまえたち，生^いきては帰^{かえ}さぬぞ。」

岩陰^{いわかげ}から全身黒^{ぜんしんくろ}ずくめの魔^ま女^{じょ}が現^{あらわ}れました。口元^{くちもと}だけ^ちが血^まのように真^まっ赤^かです。

「何^{なん}で昆虫^{こんちゅう}たちを森^{もり}から追^おい出^だしたの？みんなで仲良^{なかよ}く住^すめばいいじゃないか。」

ケン^きは聞^ききました。

「ち^とうど通^とりか^おかったら良^よい森^{もり}だ^もったんでね。私^{わたし}の理^り想^{そう}の暗^{くら}闇^{やみ}の世^せ界^{かい}に^にす^るこ^とに

決めたんだよ。黒の世界に色鮮やかな昆虫たちは邪魔だったんだ。」

魔女が笑いながら言いました。

「なんて自分勝手なんでしょう。あなたが森から出て行くべきよ。」

マヤは、怒りがこみあげてきました。

「むだ話はそこまでだ。昆虫たちとそんなに仲良くしたいなら、壁の昆虫コレクションに加えてやろう。」

魔女が、ステッキをケンとマヤに向けて大きく振りしました。すると、大きな光がマヤを包み込もうとしました。

「マヤ、あぶない！」

ケンはマヤをとっさに突き飛ばしました。しかし、光が当たったケンの体の半分が化石のように固まってしまいました。

「ケン、大丈夫？」

マヤは、驚いてケンに走り寄りました。ケンは体半分が動かなくなり、話しにくいのが消えそうな声で言いました。

「マヤ、僕たちが助かるには【友情の花】を採って魔女に花の光を向けるんだ・・・できるかな？」

マヤは大きくうなずきました。

「ああ、わたしとしたことが外してしまったね。今度こそカチカチにしてやるよ。」

魔女は再びステッキを振ろうとします。マヤは、低い姿勢でさっと移動すると、思い切

り蛇の尾を踏みつけました。そして、とうとう【友情の花】をつかみました。すると魔女

の顔がこわばったのです。そこでマヤは、迷わず【友情の花】を魔女に向けました。花

は光を放ち、魔女を強く照らします。魔女は、

「ひiiiiiiiiii～。」

と悲鳴をあげ、カラスになって飛んでいきました。